

『東方』二九九号より

学術探検と人類学との間に 揺れた研究者

野林 厚志(国立民族学博物館)

本書は明治から大正にかけて台湾に根をおろし、人類学者としてかの地をくまなく歩いた森丑之助の評伝とその著作物の再録ならびに編訳者たちの手による評伝の解説、森をとりまく人々と森との関係をつづった論考とで構成されている。評伝そのものは台湾人である楊南郡氏が中国語で執筆したものがすでに台湾で出版されており、それを日本人の台湾研究者たちが翻訳した。本書をはじめて手にした人は、本の題名にある「幻の人類学者」という言葉にとまどうかもしれない。

森丑之助という名前は、台湾に関する研究、特に台湾原住民の人たちの社会や文化に関する研究や、考古学、先史学に関する調査、研究に携わっている者は、まちがいに目にする。時には丑之助という本名ではなく、丙午という筆名で論壇に登場することもしばしばあった。明治末から大正中頃にかけて、台湾原住民の調査において比類ない知見を森が得ていたことは明らかなのだが、森についての情報は後世の研究者にはほとんど伝えられてこなかった。本書の宮岡の解説にあるように、森が生涯いかなる組織にも正式に所属しなかった(一二三頁)ことに加え、森の最期が船から洋上への投身ということも、人々が森について、後々、触れるのをためらった要因となっているのかもしれない。いずれにせよ、森は長い間、忘れられた研究者(一二三頁)であったのである。

トップページにもどる

楊南郡著／笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳
『幻の人類学者 森丑之助』
——台湾原住民の研究に捧げた生涯——
四六判・三〇四頁・風響社・二、六二五円



森の名前が再び表舞台にあらわれたのは、一九九〇年代になってからのことである。政治的な変動の中で、民主化、台湾化が叫ばれ、台湾の歴史そのものを見つめなおす機会を台湾の人々が得たときに、台湾原住民の歴史と植民地史とは避けて通ることのできない課題として現れ出た。もちろん、台湾原住民の歴史の認識には前段階として八〇年代に端を発する原住民運動の存在があったことはいうまでもない。原住民運動とは一言で言ってしまうと、台湾原住民のアイデンティティの確立を彼ら自身が目指した社会運動である。

時を同じくして、日本では別の形で資料の発掘が行なわれた。東京大学総合研究資料館に保管されていた台湾原住民の古写真の復元プロジェクトである。古写真は、鳥居龍蔵が撮影した乾板写真であり、約一〇〇年前の台湾原住民の姿が克明に刻みこまれていた。これらの甦った古写真

は台湾でも展示され、強い反響をよび、一種の古写真ブームが台湾でまきおこった。鳥居龍蔵は森とともに台湾を踏査した人類学者である。鳥居の残した写真が、森の業績が台湾で再評価されることに少なからず影響を与えたことも何か因果を感じずにはいられない。そして、誰よりも、森の業績を高く評価してきたのが、第一部「学術探検家 森丑之助」を執筆した楊氏である。

楊氏の書いた評伝は、これだけの文献を読み込める日本人はそれほど多くないと思われるほどの膨大な量の資料を駆使し、徹底した実証主義にもとづく内容となっている。それに加えて、臨場感あふれる表現が重ねられることによって、これまで知られていなかった森の実像が、当時の台湾の息遣いとともに伝わってくる迫力をもっている。これは、宮岡氏が解説の中ですでに詳細にふれている(一一五頁―一一六頁)ように、楊氏自身が誰よりも台湾を熟知しているという稀代のフィールドワーカーであるがためである。また、楊氏のフィールドワーカーの実力は文献の渉猟にも如実に現れており、実際に森が歩いたと思われる場所、そこに似た地形や植生に精通した著者であるがゆえ、資料を渉猟する際にも、いわゆる「土地勘」というものが働き、的確に資料をとらえることに成功しているのである。

ただし、楊氏にしても解説を執筆した宮岡氏にしても、なぜ、森が「幻の人類学者」となったのか、換言すれば、アカデミズムから森が距離をおき、出版事業や「蕃人楽園計画」といったものに傾倒していったかについては明確な答えは出していない。

森は一八七七年に京都に生まれた。当時の日本は幕藩体制が崩壊し、明治維新という近代化の波の真っ只中にあつた。とりわけ、遷都という大事件のために、もぬけの殻に

▶ トップページにもどる

なつてしまった京都がその立ち位置に悩んでいたことはいうまでもない。衰える京都はいわゆる京都策とよばれる一連の事業で、教育政策や勸業政策に乗り出していった。この中でも特に京都の性格を方向付けたのが、琵琶湖疏水の建設であつた。当時の京都の一年間の予算の二倍とも三倍ともいわれた規模で建設が計画された琵琶湖疏水は、明治二三年に完成した。予算規模、必要な技術力、地域住民への影響、いずれをとってみても、当時の日本における最大の事業であり、これを国家事業としてではなく、京都の事業として進めたことの意義は大きかったと言える。

幼少期から少年時代の森の目に、この琵琶湖疏水の建設がどのように映ったのかを知る術はない、しかしながら、めまぐるしく動いていく京都に育った森が、進取の気性を持ち合わせたことは想像に易い。逆に、その進取の気性は彼に自らの将来を見通すだけの時間を与えなかったように思われる。キャリアを無視した形で渡台とその後の、なかば強引とも言える行動が災いし、一時的な注目を世間から受けることはあつても、専門性をもった学問的成果をたずさえた研究者としての評価をうける機会はそれほど多くはなかった。これは森自身がつねに新しいものを探しつつづけてしまったために生じたアカデミズムとの乖離と言つてもよいだろう。すなわち、常に自らの一次資料を提供することはできても、それを検証し、また他者のデータとを照らし合わせながら、学説をまとめあげていく時間の猶予を森自身が許さなかつたのである。人類学の揺籃の時代とはいえども、こうした営みはアカデミズムには必要であつたと言わざるをえない。

人類学、民族学はしばしば「アマチュアの学問」と評されることがある。ここでいうアマチュアとはもちろん、プロ

と素人という文脈で用いられるものではない。調査の対象がもつ様々な要素、そしてそこから生まれてくる問題意識を深化させ、その問題を解き明かすための調査を行なうのが人類学の真髄ともいえる。つまり、ある一定の方法や定型化された手法、概念だけで対象を捉えるのではなく、対象とは一体何なのかから出発し、自らの問題設定に応じた研究手法を方法論的な議論も含めてマスターするという立場をしてアマチュアと称するべきなのである。

楊氏、宮岡氏の両者は、森の学問をアカデミズムにとらわれない「学術探検家」として評価している(二六頁、一八―一九頁)。確かにこの評価はある意味では当を得ているが、森の残した一次資料を前にして、アカデミズムの脈絡から彼の業績を評価することもまた必要のように思われる。実際に森が後々の台湾原住民研究に与えた影響は計り知れないからだ。先にも述べた進取の気性も手伝い、森はつねに問題意識を鋭敏にさせていた。これは人類学という分野には不可欠な態度であろう。しかしながら、アカデミズムという立場からしてみれば、森のとった行動は必ずしも十全なものとはいえなかった。楊氏は鳥居龍蔵を大胆で細部にはこだわらない性格と評し、伊納嘉矩を緻密で律儀な姿勢をもった人物として評価し、森をふくめ三人の性格を比較したうえで、森が資料の収集に専念したと解釈している(七二頁―七三頁)。しかしながら、厳しい見方をすれば、森は一次資料の収集にしか手をつけられなかったと言えなくない。それはアカデミズムからあえて身を遠ざけたことから生じる必然的な結果であり、アマチュアとしての学問である民族学をマスターするどころか、そうした手続きのなものに関心を抱かなかったのかもしれない。

第三部「交友録」は笠原政治氏による、森と森をとりまく

トップページにもどる

人たちとの文字通りの「交友録」となっている。森の生きた時代を含め、植民地時代の台湾では、内地からきた日本人と台湾に在住していた日本人との交流、そしてそれぞれの人々の間での情報交換がかなり密接に行なわれていた。台湾という土地の規模や、地理的に人が集まる都市部が限られていたことも手伝い、台湾にいる多くの日本人は互いに顔見知りであったと考えてよいであろう。

確かに第三部は、笠原氏が述べるように、台湾を舞台にした森とその同時代人とのふれ合いを断片的な記述を整理したうえで明らかにする(二三二頁)ことに主眼が置かれている。しかしながら、第三部を読み進めているうちに、明らかとなっていくのは、森が生きた時代における研究成果発信のインターフェイスとなっていたのが、人間そのものであったという点である。インターフェイスが人間であるがゆえに、同時代性、国際性、継承性が伴っていたことにも留意しておく必要があるだろう。事実、石井眞二を通して、イギリスの人類学者であるフレーザーに、森が収集、記録した台湾原住民の神話や伝説の類が伝わっていた可能性があるという指摘(二四〇頁)は、人間を通した研究成果の広がりをも具体的に感じさせる。

笠原のこれらの論考は彼自身がかかげた目的に沿って書かれたとはいえ、その背景には森の業績に対するこれまでの評価への批判的視点が随所に感じられる。それは従前にのべた学術的研究成果のインターフェイスが論文や書籍を通してのみ行なわれてきたということに対するアンチテーゼのようなものではなからうか。学会誌や学術雑誌に掲載された論文は確かに、学術的研究成果として非常に大切なものである。しかしながら、森の生きた時代に存在した学会誌等は限られており、そこに森が落とし込んで

いったものは、あくまでも一次資料に相当するものが大半をしめた。森はこうした資料から引き出される彼自身の「台湾原住民論」を人間同士の交流の中で展開していったことは十分ありえる。これらのことは評者の推測にすぎないが、一次資料に依拠しない随想的なものが、学術論文としてもはやされかねない今日状況にあつて、笠原氏の論考もまた、そうした人類学の今のありように対して、疑問を投げかけるものとなつていくように感じられるのである。

最後になるが、評者の立場から、一つ言い訳というかお詫びを呈させていただこう。というのも、評伝においては、これが翻訳されたものなのかと目をうたがうような実力を見せつけられ、あまりにも的を得ている評伝の解説が続き、森自身の著作を配することによって読者に具体的な経験を持たせた後、森をとりまく人々というまったく違った観点から、評伝を検証し森の生きた時代を伝える論考でしめくくるという構成、そしてそれぞれがもつ高い質を前にして、本書全体の書評を著すのは屋上屋を架すことになかならないと何度も頭を悩ませた。この書評によつて本書のもつ価値がそこなわれたとしたら、それはひとえに本書の迫力に評者がたちうちできなかったということ、ご容赦いただきたい。

徹底した攻めの姿勢が貫かれた本書は、著者と編訳者たちの精気と迫力とに満ち溢れている。民族誌を描く態度についての議論を重ねることばかりを是とする現在の文化人類学の風潮にあつて、自らが生まれ育った土地、自らの人生の少なからぬ時間を過ごした調査地に対するやさしいまなざしと、そこに身を投じた一人の人類学者に対する尊敬の念がこめられた本書は、人類学を矮小化する議論に対す

▶ トップページにもどる

る挑戦ともいえる労作である。同じ台湾原住民研究に身をおくものとしても、こうした著作が生まれてくることにはいささかの嫉妬をおぼえると同時に身のひきしまる思いをいだくのである。